神戸新聞（夕刊）
'14.6.14

わいど&ズーム

過疎地を巡る学生スーパー

上郡町で関西福祉大

雑貨や食料 買値で販売

限界集落支えるモデルに

関西福祉大（赤穂市）の学生が、軽ワゴン車で兵庫県上郡町の山間部の過疎集落を回る〝移動スーパー〟を運行している。住民は月２回、若者と交流しながら買い物をすることを心待ちにし、「なくてはならない生活の一部」との声が上がる。７月で開始から１年。参加する学生たちは「地域の生活を支えている」との手応えを感じ、活動を続ける。（杉山雅崇）

集落で店舗を構える移動スーパー。お年寄りが数日分の食料を買い求めた。＝兵庫県上郡町大富（いずれも撮影・大森　武）

同大社会福祉学部の溝端剛教授(58)のゼミ生19人が、県の助成を得て活動する。巡回するのは上郡町の山あいに点在する計4集落。同町中心部のスーパーで生活雑貨や食料品を購入し、そのまま値段で販売する。

5年前、溝端教授が同町社会福祉協議会から過疎集落の意識調査を委託された。「慣れ親しんだ愛着ある土地に長く暮らしたい」。困難を抱えつつも、山村の生活に愛着を持つ人々の思いに応えるため、ゼミ生と話し合って運行を始めた。

町の中心部から約25分、曲がりくねった山道の先にある鞍居（くらい）地区の富満（とみま）集落にワゴン車「トライアングル号」が到着すると、住民らが続々と集まる。

この日参加した学生は4人。車外に設置した机にパンや調味料などを手早く並べる。「おばあちゃん元気にしてた？」「元気だよ。最近暑いね」。顔なじみになったお年寄りとの会話が弾む。

自宅から約2時間かけて歩いて来る田渕としえさん(90)は「買い物が楽しみ。ほんと感謝感謝や」と、牛乳を片手に学生たちに笑顔で語り掛ける。

次の目的地、赤松地区の市原集落は最年少の住民が88歳という「限界集落」だ。買い物の後は、坂の上の住居まで学生が荷物を持って付き添う。訪問を重ねるたびに、信頼関係が築かれていく。

同大2年の木南向平さん(20)は「お年寄りの笑顔を見ると、また来ようという気持ちになる。これからも続けたい」。溝端教授は「10～20年後にはこのような集落が各地にできる。それを支える仕組みを生み出していければ」と話している。

坂道を上るお年寄り。学生が買い物袋を持って寄り添う＝兵庫県上郡町岩木

複写はご遠慮ください。